

英語モジュールにみる 内部圏の英語変種における発音の諸相

新城 真里奈

Pronunciation Features in the English Modules: English Varieties in the Inner-Circle

ARASHIRO Marina

Two universities in Japan have collaboratively developed a free online English learning website, KANDA×TUFS English Modules Dialog. The website is targeted at intermediate to advanced learners of English and provides users with opportunities to learn linguistic and cultural differences in English. This paper mainly explains the pronunciation aspects of the English Modules Dialog, describing types of the features chosen to give pronunciation descriptions and explaining how these descriptions are given on the website. As the website is designed so that its users can learn linguistic features of a given English dialect, one of the main types of pronunciation explanation is the inter-dialect differences in vowels. In order to facilitate understanding of native speakers' natural speech, the linking of sounds and sound changes (e.g. elision and assimilation) occurring frequently in the dialogues were also described. As for suprasegmental features, explanations were given where contrastive or emphatic accent was observed.

キーワード： 発音説明、聴覚印象、音声分析、母音、子音、R音性

1. はじめに

2002年度より21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」に採択されて以降、東京外国語大学では、インターネット上の無料教材「TUFS言語モジュール」を開発してきた。これまでに22言語の会話モジュールが開発され、そのうち2012年までにドイツ語、フランス語、中国語、アラビア語では標準方言に加えて、主要な地方方言のモ

ジュールも作成されていた。一方で、英語のモジュール開発は他言語に比べて遅れを取っており、子ども向け発音モジュールは作成されていたものの、大人向け（あるいは中・上級学習者向け）の会話モジュールは作成されていなかった。そこで、長年のモジュール開発で培われた東京外国語大学の技術と神田外語大学が持つ豊富な人的資源を生かし、2012年度より2大学共同で「World Englishes——社会言語学的変異研究に基づいた英語モジュール（以下「英語モジュール」とする）」を開発する運びとなった。

本モジュールの開発の背景には、以下の3点がある。第1に、大学などの高等教育だけでなく、初等、中等教育における英語母語話者の教員が充実し、ALT (Assistant Language Teacher) として様々な地域から教員が来日するようになったことが挙げられる。その結果、教育現場での英語が多様化し、生徒や学生はもちろんのこと、アメリカ英語にしか馴染みなかった教員も、それ以外の地域出身のALTの英語に戸惑いを覚えるようになった。第2に、2006年より「新」TOEICの導入により、リスニング問題でアメリカやカナダ出身の英語母語話者だけでなく、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドの母語話者の発話も出題されるようになったことが挙げられる。第3に、言語学の分野において1980年代以降、“World Englishes”という概念が広まってきたことが挙げられる。これは、英語の様々な変種は、各変種の話者の文化を反映しているため異なっているのであり、ある変種が他より優れているわけではないという考えである (Kirkpatrick, 2007: 3)。

以上のような現状や学術的傾向をふまえて、本英語モジュールでは「内部圏」(Kachru 1985: 12)で話されている主要な5つの英語変種の開発を進めてきた。その成果として、2012年度にはアメリカ英語版およびオーストラリア英語版、2013年度にはイギリス英語版およびニュージーランド英語版、2014年度にはカナダ英語版がインターネット上に公開されている。

英語モジュールの開発にあたって、筆者は研究協力者として発音説明の記述に携わってきた。本稿では、英語モジュールの特徴を簡潔にまとめ、各変種版の発音説明の記述方法および記述内容を解説する。

2. 英語モジュールの特徴と出演者について

英語モジュールは、無料で利用することが可能なオンライン英語学習ツールであるという点で利便性が高い。また、全ての変種版モジュールで40の言語機能に関連するダイアログがあり、量的にも充実しているといえる。しかし、最大の特徴は、全ての変種版の全てのダイアログに各分野の専門家によって語彙説明と発音説明が付けられており、各変種が話されている地域の社会的背景や、語彙および発音上の主な特徴を学ぶことができる点である。40のダイアログのうち、半分は共通スクリプトで、一部表現を変更している箇所もあるが、ベースとなっているスクリプトはどの変種版でも共通のものであるのに対し、半分は各変種に特有の語彙や表現を多く含むよう作成された個別スクリプトである。そのため、個別スクリプトではそれぞれの変種に特有の語彙や表現を多く学ぶことができる。各変種の発音上の特徴は、個別スクリプトのダイアログでも「発音説明」を確認しながら学ぶことができるが、共通スクリプトのダイアログを比較すれば、より明確に変種間の発音のちがいに気づくことが可能となるだろう。

英語モジュールでは、出演者に事前にスクリプトを配布し、各自自宅で練習してから、数日間に分けて学内のスタジオで撮影を行った。スクリプト自体は、各変種の社会的背景や語彙的特徴を反映させることができるよう、あらかじめ用意されたものであるが、発音については何も事前に指示を与えるという事は行っていない。そのため、モジュールで聞くことのできる発音は、各出演者が同郷の人同士で話す時の自然な話し方であり、「発音説明」として掲載している特徴は、撮影後、聴覚印象による音声分析に基づいた記述である。

これまでに作成された英語モジュールの出演者は皆、神田外語大学のEnglish Learning Institute (ELI) に所属する専任英語講師である。アメリカ英語版の出演者は、標準的なアメリカ英語である「一般米語 (General American)」と呼ばれる発音をする話者で、カナダ英語版の出演者の発音もほとんど一般米語と同一である。一方、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドの標準発音は、「容認発音 (RP: Received Pronunciation)」

あるいはBBC Englishと呼ばれる、かつてのイギリス上流階級の発音が基になっているものである。しかし、現在はこの(社会)方言の話者は、イギリスの人口の3~7%とも言われるほど少ない。そのため、イギリス英語版の出演者は、より多くの人に話されている、エスチュアリー英語(Estuary English)の話者とした。エスチュアリー英語は、RPとロンドンの労働者階級の発音であるCockneyの中間的な発音である。オーストラリア英語版とニュージーランド英語版の出演者も同様、中程度の訛りであるGeneral AustralianとGeneral New Zealandの話者である。とはいえ、イギリス英語版、オーストラリア英語版、ニュージーランド英語版では、より標準的な発音に近い発音から、非標準とされる特徴をより多く使用する話者が混在しており、訛りの強さが出演者によって異なっていた。特に、オーストラリア英語版「挨拶する」のEvan役の男性と、ニュージーランド英語版「挨拶する」のKieran役の男性は、オーストラリア英語、ニュージーランド英語に特有の特徴を最も多く残した発音であった。なお、すでに公開済みの5変種版の出演者の出身地などを、本稿末尾の資料1に掲載している。

3. 英語モジュールの発音説明

本節では、各変種の母音、子音の主な特徴を概説しながら、英語モジュールの発音説明を記述するにあたって、どのような語句／発音に説明を付けたのか、どのような形式で記述したのかを、実際ウェブページ上に掲載している例を提示しながら説明する。

英語では、発音における変種間のちがいは子音より母音で多く観察される。これまでに公開されているモジュールの5変種は、R音性的(rhotic)であるかと非R音性的(non-rhotic)であるかによって、2つに大別することができる。アメリカ英語およびカナダ英語は前者で、この2変種はその他の音声的側面においても非常に類似性が高い。イギリス英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語は後者である。また、これら3つの方言は、R音性以外の側面でも共通する特徴が多い。しかし、オーストラリア英語とニュージーランド英語においては、独自の特徴も観察される。

3.1. 発音説明

発音説明では、大きく分けて3種類の説明を付した。1つ目は、各方言の音声の特徴を学ぶための、分節音の特徴に関する説明である。2つ目は、英語母語話者の発話の聞き取りや、含意の理解につながるよう、自然発話で頻繁に起こる音の連続や脱落、変化に関する説明である。3つ目は、イントネーションに関する説明で、選択疑問文などの基本イントネーションパターンや、強調や対比のイントネーションが使用されている箇所に説明を付した。ウェブページ上の見やすさや理解しやすさを確保するために、これら3つの側面について特に顕著な差がある特徴や、意味の区別に関与する重要な特徴、聞き取りに大きく影響してくるような発音に対して優先的に説明を付した。

説明を記述する際は、大学の授業等での使用を想定して、ある程度の専門性を持たせるために基本的な音声学用語や一部の音声記号を使用しつつも、一般の閲覧者が独学で使用しても困難なく理解できるよう配慮し、カタカナ表記を併記した。また、アメリカ(およびカナダ)英語とイギリス英語の発音説明は、両方言の比較をする形でちがいを説明し、オーストラリア英語およびニュージーランド英語は、基盤になっているイギリス英語と比較して共通点や相違点を説明するとともに、より日本人に馴染みのあるアメリカ英語とのちがいも説明した。

3.2. 母音

アメリカ英語とカナダ英語の音体系はほとんど同じである。ただし、“about”など、アメリカ英語では [aʊ] と発音される音が、カナダ英語では始まりの舌の位置が高めで、[əʊ] と発音される場合があり、これを“Canadian Raising”と呼ぶ。現在はこの発音は個人差があり、カナダ英語版の出演者の中でも、頻繁に“Canadian Raising”が観察される話者もいたが、ほとんど観察されない話者もいた。これが観察された場合は、表1のように説明を付した。

先述したように、アメリカ・カナダ英語と他の3変種の母音体系は、特にR音性(rhoticity)が関与してくる母音に大きなちがいがある。北米英語

表1 Canadian Raising の発音説明例 (カナダ英語版)¹⁾

1	<p>But, please do not leave food out anywhere when you go to sleep. “OUt” は、始まりの舌の位置が高めで「アウ」ではなく「オウ」のように発音される。Canadian Raising と呼ばれる現象。また、“out” の /t/ は閉鎖の開放がないため、“food out” は「フードウ」のように聞こえる。 [禁止する: CA]</p>
2	<p>It’s about that time, eh? “abOUt” は始まりの舌の位置が高めで、「アウ」ではなく、「オウ」のように聞こえる。Canadian Raising という現象。“It’s about that time” は繋げて発音されるため、「ツボウダッタime」のように聞こえる。 [予定を述べる: CA]</p>
3	<p>Yeah. We’re driving to my parents’ house. “hOUse” の始まりの舌の位置が高め。Canadian Raising という現象。 [予定を述べる: CA]</p>

([] のなかは動画の機能名、CA = カナダ英語版)

の R 音性的二重母音 /ɪə, eə/ と /ɑə, ɔə, uə/ は、イギリス・オーストラリア・ニュージーランド英語ではすべて非 R 音性的で、/ɪə, eə, ɑ:, ɔ:(, uə)/ である。また、アメリカ英語で前舌短母音の /æ/ を持つ単語のうち、“ask” に代表される一部の語は、イギリス・オーストラリア・ニュージーランド英語では後舌長母音 /ɑ:/ を持つ (このような語を総じて “Ask-words” と呼ぶ)。非 R 音性的の母音および Ask-words に関する発音説明例を表 2、3 に示す。

上記以外にも、イギリス英語の前舌短母音の /æ/ はアメリカ英語より舌の位置が低め ([a]) であり、後舌低母音に関してはアメリカ英語では非円唇の /ɑ/ であるのに対し、イギリス英語では円唇の /ɒ/ であるなどのちがいもある。しかし、これらは音声レベルでの差であり、日本人学習者にとってはちがいを聞き取ることが困難であるため、英語モジュールでは説明を付さないこととした。

オーストラリア英語、ニュージーランド英語の母音体系は、基本的にはイギリス英語と類似点が多い。しかし、前舌母音にイギリス英語とは異なる

英語モジュールにみる内部圏の英語変種における発音の諸相

表2 非R音性的母音に関する発音説明例

1	The first thing you need to do is fill out the driving licence application form. “fIRst”は英英語では長母音 /ɜ:/ で、“r”は発音されない。“fORm”は英英語では長母音 /ɔ:/ で、“r”は発音されない。 [順序について述べる: UK]
2	We’ve lived here for 3 years! “hERE”と“yEARs”/の“r”は発音されない(豪英語・英英語)。 [さよならを言う: AUS]
3	For example, Granny Smith is more crispy and tart, and Red Delicious is softer and sweeter. “tARt”は、長母音 /ɑ:/ で、“r”は発音されない(豪英語・英英語)。 [特徴についてたずねる: AUS]
4	“tARt”は長母音「アー」で、“r”は発音されない(英・豪英語共通)。 [同上: NZ]

(UK=イギリス英語版、AUS=オーストラリア英語版、NZ=ニュージーランド英語版)

表3 Ask-words に関する発音説明例

1	Okay, I’ll lock up after this email. “after”は米英語では /æ/, 英英語では /ɑ:/。 [予定を述べる: US]
2	“after”は英英語では長母音 /ɑ:/、米英語では /æ/。また、語末の“r”は通常英英語では発音されない。“lock up after”は繋がられて、「ロッカッパーフタ」のように発音されている。 [同上: UK]
3	“After”は長母音「アー」で、語末の“r”は発音されない(英・豪英語共通)。 “lock up after”は繋がられて、「ロッカッパーフタ」のように発音されている。 [同上: NZ]

(US=アメリカ英語版)

る特徴がある(図1、2²⁾)。イギリス英語での母音の舌の位置は白抜きの円で示し、オーストラリア英語およびニュージーランド英語の母音は円の中に斜線を引いた。イギリス英語とオーストラリア英語を比較すると、オーストラリア英語では後舌母音が中舌化し、全ての前舌母音について、舌の位置がイギリス英語より高めである。イギリス英語の狭母音の /i:/ は、

図1 イギリス英語とオーストラリア英語の(前舌)母音の比較

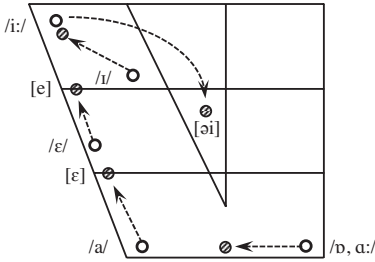


図2 イギリス英語とニュージーランド英語の(前舌)母音の比較

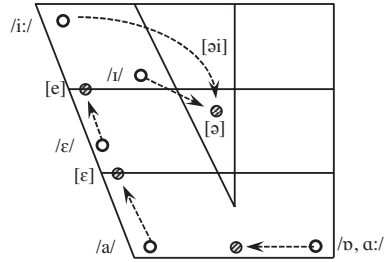


表4 オーストラリア英語の母音の特徴に関する発音説明例

1	Why don't you come over for tea tomorrow night and we'll show you where everything is and give you a set of keys? “tEA”は二重母音化して「ゥイ」のように発音され、「トゥイ」のように聞こえる(豪英語)。“key”も同じく二重母音化し、「クイズ/ケイズ」のように聞こえる(豪英語)。 [依頼する: AUS]
2	Let's go and see if the people are alright and if they have any more information about the driver. “hAve”は「エ」のように発音されている(豪英語)。 [注意をひく: AUS]
3	Dead set? “sEt”は「イ」のように発音されている(豪英語)。 [しなくともよいと言う: AUS]

オーストラリア英語では二重母音化されて、[ii~əi]で発音されることが多い。オーストラリア英語版モジュールで取り上げた母音に関する説明の例を表4に示す。

ニュージーランド英語の母音はオーストラリア英語と共通点が多いが、前舌母音の/i/については、オーストラリア英語ではイギリス英語より前よりで、かつ高めであるのに対し(図1)、ニュージーランド英語では中舌化し、[ə]で実現される(図2)。ニュージーランド英語の母音の特徴に関する発音説明例を表5に示す。

表5 ニュージーランド英語の母音の特徴に関する発音説明例

1	<p>I accidentally knocked over your vase and it fell and smashed. “Accidentally” は狭めで、「エ」のように発音されている（豪英語共通）。 “knocked” の /k/ は閉鎖の開放がない。“knocked over your” は繋げられて、「ノットゥヴェア」のように聞こえる。“vase” は「ヴァーズ」と発音されている（英・豪英語共通。米英語では「ヴェイス」）。“smAshed” は狭めで、「エ」のように発音されている（豪英語共通）。 [謝る： NZ]</p>
2	<p>Should've bought one when I still had a bit of coin; before the petrol companies pinched it all. “pEtrol” はせまめで、「イ」にちかく、“-tr-” は「チュ」のようになっているため、「ピチュウ」のように聞こえる。“companies” の “-pa-” は発音されておらず、「カムニス」のようになっている。“pInched” はあいまい母音 /ə/ にちかく、“it” の /t/ は有声。“pinched it all” で、「ペンチテロー」のように発音されている。 [数字についてたずねる： NZ]</p>
3	<p>OK. How do you think you'll fit in on campus? “fit” はあいまい母音 [ə] で、/t/ は有声。“fit in on” で「フリノン」のように聞こえる。 [理由を述べる： NZ]</p>

3.3. 語彙的なちがい

一部の語彙について、アメリカ・カナダ英語とイギリス・オーストラリア・ニュージーランド英語では母音が異なるものがある。英語モジュールのスクリプトでは、例えば “vase”、“tomato”、“schedule”、“0 (数字)” などのような単語が出てきたが、そのような単語には、表6、7に示されているような説明を付した。

3.4. 子音および自然発話における音の連続、変化、脱落

現在公開されている5つの英語モジュールで扱っている変種間では、子音における顕著な差はほとんどない。1点ちがいを挙げるとすると、/t/ の異音として、アメリカ・カナダ英語では有声化した [ɾ] が使用され、イギリス英語では声門閉鎖音化した [ʔ] が使用される点がある。前者はアメリカ・カナダ英語において頻繁に使用される母音間の /t/ の異音とされてき

表6 語彙的なちがいの発音説明例: vase [謝る]

US版	“vase”は米英語では /veɪs/, 英英語では /vɑːz/。
CA版	カナダ英語では、“vase”はアメリカ英語と同様に /veɪs/。イギリス英語と豪英語では /vɑːz/。カナダ英語では、/veɪz/ もときどき聞かれる。
UK版	“vase”は英英語では /vɑːz/, 米英語では /veɪs/。
AUS版	“vase”は「ヴァーズ」と発音されている。この語は米英語では /veɪs/, 英英語では /vɑːz/。
NZ版	“vase”は「ヴァーズ」と発音されている(英・豪英語共通)。米英語では「ヴェイス」。

表7 語彙的なちがいの発音説明例: tomato [程度についてたずねる]

US版	“tomAto”は米英語では /ei/, 英英語では /ɑː/。“tomato”の2番目の /t/ は有声で、「トゥメイロウ」のように聞こえる。
CA版	“tomAto”はアメリカ英語とカナダ英語では /ei/, イギリス英語と豪英語では /ɑː/。“tomato”の2番目の /t/ は有声で、「トゥメイロウ」のように聞こえる。
UK版	“tomAto”は英英語では長母音 /ɑː/, 米英語では二重母音 /ei/。
AUS版	“tomAto”は米英語では /ei/, 豪英・英英語では /ɑː/。また、2番目の /t/ は有声で、「トゥマーロウ」のように聞こえる。
NZ版	“tomAto”は米英語では /ei/, NZ英語では豪英・英英語と同じ /ɑː/。

たが、イギリス英語においても有声化した [ɾ] の使用は増えてきていると報告されており (Cruttenden 2014: 178)、英語モジュールのイギリス英語版でも観察された。反対に、声門閉鎖音 [ʔ] は、イギリス英語において音節末の /t/ の異音として使用されていたが、現在では、アメリカ英語やカナダ英語でも音節主音の /l/ や /n/ の前で使用されることがある (Gordon 2008: 74; Clarke 2008: 174; Schneider 2008: 393)。イギリス英語版の出演者と比較すると頻度は低かったが、アメリカ英語版の出演者の発話でも観察された。

子音には大きな方言差はないものの、母語話者の自然発話では、音の連

英語モジュールにみる内部圏の英語変種における発音の諸相

続や変化によって、子音の音声実現が変化する。そのため日本人英語学習者は、聞きなれているはずのアメリカ・カナダ英語でも、母語話者の自然な発話を聞き取るのは困難になる場合がある。英語モジュールは中・上級学習者を対象に作成されていることもあり、母語話者同士の自然な会話という場面設定で、発話速度が学習教材としては比較的速い。そのため、上記のような音変化が頻繁に起こっている。このような発話の聞き取りを補助するために、発音説明欄では隣接する音同士が連続して、その結果どのように聞こえるようになってきているのか、また、どの音が脱落したり変化したりして、どのように聞こえるのかについても説明している（表8）。

表8 子音の特徴および自然発話で起こる音の連続、脱落、変化に関する発音説明例

1	/t/ 有声化 リンキング	Yup, just came out of the oven. “just” の /t/, “out” の /t/ は有声。“just came out of” は、「ジャ ス ケイマウダヴ」のように聞こえる。 [特徴についてたずねる: AUS]
2	/t/ 声門閉 鎖音化	Was getting thirsty! “getting” の /t/ は声門閉鎖音で、「ゲッイン」のように発音されている。“thIRsty” は英英語では長母音 /ɜ:/ で、“r” は発音されない。 [手段についてたずねる: UK]
3	鼻音化 リンキング	(Is) that Brian down the end of the bar? “down the” は繋げられて、「ダウンニ」のように発音されている。“of” の /v/ は発音されておらず、“end of the bar” は繋げられて「エンダダバー」のようにになっている。 [例をあげる: UK]
4	開放の省略	I wanted to talk to you about my work in your class. “wanted” の /d/ は閉鎖が開放されていない。“wanted to” で「ウォナットウ」のように聞こえる。 [しなければならないと言う: CA]
5	/t/ 有声化 /tj/ 融合	What about you? Any plans? “what” の /t/ は有声で、次の “about” と繋げて発音されて「ラ」のように聞こえる。さらに “about” の /t/ と “you” が繋げて発音され、「チュ」のように聞こえる。 [予定を述べる: US]

6	/zj/ 融合	I suppose you're right. “suppose you're” は繋がられて、「サボウジュア / サボウジャ」のように聞こえる。 [希望を述べる: NZ]
7	/t/ 脱落	Patrick is just meeting everyone today, and he'll start training tomorrow. “just” の /t/ は脱落して、「ジャス」のように発音されている。 [人を紹介する: CA]
8	/d/ 脱落 リンキング	Been going on and on and on about it all week. “on and on and on about it” の “and” の /d/ は発音されていない。また、隣接する語同士が繋げて発音され、このフレーズは「オーネノーネノーナバウティツ」のように聞こえる。 [予定を述べる: UK]
9	/t/ 脱落 /h/ 脱落 /t/ 有声化 /t/ 開放の省略	Really, though, you shouldn't let her get to you. “shouldn't” の /t/ と “her” の /h/ は発音されていない。“let” の /t/ は有声で、次の “her” と繋げて発音されて、「レラー」のように聞こえる。“get” の /t/ の閉鎖は開放されず、“get to” は「ゲットウ トウ」ではなく「ゲットウ」のように聞こえる。 [条件をつける: US]
10	介入の /r/ (intrusive /r/)	I'm just in awe of it all. “awe of” が繋げて発音されているが、母音の連続を避けるため、間に /r/ を挿入している。その結果、「オーロヴ」のように聞こえる。 [しないでくれと言う: AUS]

3.5. 対比と強調のイントネーション

上記で述べた分節音に関する説明よりは少ないが、選択疑問文などの基本的なイントネーションパターンや、対比や強調がイントネーションで表現されているところにも説明を付している。表9に示されているように、対比(1-2)や強調(3-4)のイントネーションが使用されている場合、どの単語にアクセントが置かれていて、どのような含意を表すのかを説明した。

4. おわりに

本稿では、内部圏の5つの英語変種の主要な音声的特徴に言及したが

表9 イントネーションに関する発音説明例

1	No, no, she's fine. It's her mother. “she's” と “mother” に対比のアクセントが置かれている。 [許可を求める: UK]
2	Anyway, what brings you here? “brings you” は繋げられて、「ブリングジャー」のように発音されている。 “you” に対比のアクセントが置かれており、「(僕はよく来るところだけど、) 君はどうしたの?」というニュアンス。 [人を紹介する: NZ]
3	I'd really like to go, but it depends... “like” に強調のアクセントが置かれている。「行きたい気持ちはあるが、 ～」 [条件をつける: UK]
4	Yeah, nah, you could be right. “could” に強いアクセントを置いて発音している。可能性は認めつつも、完全には同意していないことを表している。 [希望を述べる: NZ]

ら、英語モジュールの発音説明について解説した。表1-9の発音説明例でも示したように、一部の専門用語は使用しているが、カタカナ表記を併記し、イントネーションの説明ではどのような事柄が含意されているかを明確に示すなど、一般の閲覧者にもわかりやすいように説明を記述している。また、先述したように、英語モジュールでは発音説明だけでなく、語彙説明も付されている。今後は、大学の社会言語学の授業等で使用するだけでなく、一般の閲覧者が独学で様々な英語変種の発音や語彙の特徴を学ぶためのツールとして広まることが期待できる。

注

- 1) 表1~9の“US”、“CA”、“UK”、“AUS”、“NZ”はそれぞれ、英語モジュールの「アメリカ英語版」、「カナダ英語版」、「イギリス英語版」、「オーストラリア英語版」、「ニュージーランド英語版」を指す。
- 2) イギリス英語は Cruttenden (2014)、オーストラリア英語は Horvath (2008)、ニュージーランド英語は Bauer & Warren (2008) に基づいて作図。図1、2で示している3変種の母音の特徴は、英語モジュールの出演者の発音でも観察された。

参考文献

【和文】

- 川口裕司・芝野耕司・峰岸真琴編 (2004) 『言語情報学研究報告 1 TUFUS 言語モジュール』, 21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
- 田中晴美・田中幸子編 (2012) 『World Englishes 世界の英語への招待』 昭和堂
- 本名信行 (2003) 『世界の英語を歩く』 集英社新書

【欧文】

- Bauer, L. & Warren, P. (2008). “New Zealand English: phonology” In Burridge, K. & Kortmann, B. (eds.), *Varieties of English 3: The Pacific and Australasia* (pp. 39–63). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Burridge, K. & Kortmann, B. (eds.) (2008). *Varieties of English 3: The Pacific and Australasia*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chapman, M. & Newfields, T. (2008). “The ‘New’ TOEIC” In *JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter*. 12–2. pp. 32–37.
- Cruttenden, A. (2014). *Gimson’s Pronunciation of English (8th ed.)*. Oxon/New York: Routledge.
- Clarke, S. (2008). “Newfoundland English: phonology” In Schneider (ed.), *Varieties of English 2: The Americans and the Caribbean*. (pp. 161–180). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Gradoll, D. (1997). *The Future of English?: A Guide to Forecasting the Popularity of the English Language in the 21st Century*. The British Council.
- Gordon, M. J. (2008). “New York, Philadelphia, and other northern cities: phonology” In Schneider (ed.), *Varieties of English 2: The Americans and the Caribbean*. (pp. 129–143). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kachru, B. B. (1985). “Standards, codification and sociolinguistic realism: The English language in the Outer Circle,” In R. Quirk & H. Widdowson (eds.), *English in the World*. (pp. 11–30). Cambridge University Press.
- Kirkpatrick A. (2007). *World Englishes*. Cambridge University Press.
- Kortmann, B. & Upon, C. (eds.) (2008). *Varieties of English 1: The British Isles*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kretzschmar, W. A. Jr. (2008). “Standard American English pronunciation” In Schneider (ed.), *Varieties of English 2: The Americans and the Caribbean*. (pp. 37–51). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Schneider, E. W. (ed.) (2008). *Varieties of English 2: The Americans and the Caribbean*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Schneider, E. W. (2008). “Synopsis: phonological variation in the Americas and the Caribbean” In Schneider (ed.), *Varieties of English 2: The Americans and the Caribbean*

英語モジュールにみる内部圏の英語変種における発音の諸相

bean. (pp. 383–398). Berlin: Mouton de Gruyter.

【インターネット資料】

JET Programme 「JET プログラムの歴史」 閲覧日：2014年10月30日

<http://www.jetprogramme.org/j/introduction/history.html>

KANDA×TUFS 英語モジュール <http://labo.kuis.ac.jp/module/index.html>

TUFS 言語モジュール <http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/>

資料1 英語モジュール出演者の背景情報

	出演 動画	性別	出身地	日本 滞在歴	その他
アメリカ	#1	男性	Chicago	4年	日本人女性と結婚。
	#2	女性	Colorado	4年	母親は日本人。
	#28	男性	New York	4年	ヒスパニック系。
	#28	女性	California	3年	—
カナダ	#1	男性	Alberta	11年	14–21歳の間New Brunswickに居住。
	#1	女性	Manila	2年半	13歳でフィリピンからカナダに移住。
	#3	女性	Ontario	1年半	—
	#5	男性	Ontario	2年	来日前、韓国に合計8年居住。
	#7	男性	Vancouver	5年	日本に3年居住後、韓国に5年居住し、再度来日。
イギリス	#1	男性	Salisbury	8年	20代の頃1年間南アフリカに居住。
	#8	女性	London; Cardiff	4年	7歳の頃LondonからCardiff(ウェールズ)に転居。18歳から21歳までOxford。その後は、日本、London、Budapest、Newcastle、Hanoiなどに居住。
	#8	男性	England; Germany	7年	22歳まで主にイングランドとドイツに居住。23–33歳の間、日本とイングランドに住み、その後ハノイに1年、ホーチミンに1年居住。その後再度来日。

グローバル・コミュニケーション研究 第2号 (2015年)

オーストラリア	#1	男性	South Australia	計5年	26-29歳の間、日本に居住。その後シドニー(3年)、マドリード(3年)、ニュージーランド(1年)に住み、37歳で再度来日。出演者の中で最もオーストラリア訛りが強い話者。
	#3	女性	Canberra	15年	日本人男性と結婚
	#4	女性	Melbourne	1年	18-20歳の間 Queensland、30-35歳の間タスマニアに居住。来日前、韓国に4年居住。
	#8	男性	Perth	8年	日本人女性と結婚
ニュージーランド	#1	男性	Taranaki (NZ北島)	5年	20代の頃、オーストラリア、英国、イタリアに各1~2年ずつ居住経験あり。その後30歳の頃から韓国に6年住み、来日。出演者の中で最もニュージーランド訛りが強い話者。マオリの血を引く。
	#1	女性	Taupo (NZ北島)	1年未満	0-6歳 Taupo (NZ北島)、6-12歳シンガポール、12-14歳 Dundun (NZ南島)、14-24歳 Palmerston (NZ南島)に居住。来日前、ソウル(韓国)に6年、上海(中国)に2年、ホーチミン(ベトナム)に5年居住。
	#8	男性	Chichester (イングランド)	計7年	11歳で Wellington (NZ北島)に移住。15歳の頃1年日本に留学。